

# 名誉顧問のコモンセンス 1

## 『報徳記』を読む

### 二律背反の解決先生 1

#### 天道か、人道か？



#### 二律背反先生

世の中は、争いで出来ています。必ず、二つの相対する力が働きます。「生きる」に対しては、「死」が力を発揮します。健康に対しては病気が邪魔をします。幸せに対しては不幸が、平和に対しては戦争が、二つの力が相い対します。これを、「二律背反」といいます。報徳先生は、「二律背反先生」といってもいいほど、解決不可能な矛盾をはらんだ難しい事件に遭遇します。でも、どんな矛盾に満ちた難問・課題でも、見事に解いて見せます。まさに、「二律背反解決先生」と言って良いほどです。

**報徳仕法の解決法** 報徳先生は、沢山の本を読んで、多くのことを考え、素晴らしい教えで人々を諭(さと)しました。その教えは本から学んだことではありますが、本だけからは得られない先生独自の解釈が込められています。ここが凄いところです。世の中には、「右か左か」「正か邪か」「徳か損か」といった「二律背反」の事柄が沢山あります。特に特に、江戸末期の貧農民の日々の生活は、「あれか、これか」といった「二律背反」の難題ばかりです。直ちに対処法を決めて、直ぐに実践しなければなりません。それに、これ

は本を読んだだけでは解決出来ない具体的な問題ばかりです。でも先生は、現実主義者です。農政の仕事は、毎日、問題が発生し、それぞれにその問題に合った「仕法」(解決法)を施さなければなりません。それを先生は、見事に解いて見せるのです。

「だれにも頼らず、自分一人だけで解決すること」 — これは、これまでに先生が直面した問題に対してたえず行ってきたことです。まず、若いとき、先生には自分の時間はありませんでした。常に働いていなければ食べていけないのです。だれも助けてくれません。仕方なく、終日、山に出ては薪を拾い、帰っては畑を耕し、夜は草鞋を編みました。瞬時として休む時がありません。でも、本を読んで学びたいのです。どうすれば良いのでしょうか？ この「働く時間×勉強時間」の「こちらを取ればあちらが立たず」の「二律背反」の難題は、だれも助けてくれない社会の中で生まれました。14歳で父親をなくし、田地・田畑・自宅までも洪水でなくし、16歳のときに母親も亡くし、幼い弟二人と全くの天涯孤独で無一文です。親類縁者も心から真剣に助けてはくれません。弟二人は母の実家が引き取ってくれ、金次郎自身は親戚筋の万兵衛が面倒をみてくれました。

「金次郎はひたすら万兵衛を頼りにし、ことに養育をうけているので、すべてに心をつくし、万兵衛の命ずることならどんなこともそむかず、毎日罷業の手伝いをし、夜は夜ふけまで縄ないをし、雪・風・寒夜もいやがらずに手伝った。だんだんと月日がたつにつれて、金次郎が考えたのは、たとえ小百姓であっても、文字を書くこと、算盤を使うことの心得がなくては自分の望みに反すると考えて、農事の夜なべを終えたあと、勉強したいと万兵衛に言ったところ、万兵衛は、『百姓は農業に精をだし、年貢諸役さえ納めれば何をしてもかまわない。夜なべを終えたあとに勉強したいということはやむをえないが、第一に明りがなくてはやれないだろう。油の出しようがないぞ』と言った。仕方がないので、だんだん考えて、万兵衛の世話にならぬよう油の調達を工夫したら、万兵衛もとやかく言うまいし、農業手伝の暇に、金次郎所有の荒地のうちに少しずつ菜種をまき、よく手入れをしたら収穫もあるだろうと考えて、その年の秋に村内の懇意の者から菜種を五勺ほど貰い、荒れ地の内、塀の左右にまき付け、手入れをしたところ、相当に成長し、翌年の夏には菜種七升余がとれたので隣村の油屋嘉右衛門方へ持参し、『油とかえてほしい』と頼んだ。油屋はすぐに承知し、『菜種一升について油二合の割合で渡す』というので、必要のたびに渡してくれるように約束して油二合をうけとった。ともあれ万兵衛の意見を生かして自立自習の決意を固め、小を積んで大をなすことをつかんだ端緒が夜学の燈油であったことに、少年としては稀な強烈な意志をみるのである」。

【町田時左衛門『記録』;『二宮尊徳』11頁】

## 績小為大

自立自習をしたいのに時間とお金がない「二律背反」に陥った報徳先生を助けたのが、この「小を積んで大をなす」と言う自ら産み出した手法です。これを、先生は、「**績小為大**」(せきしょうだい)といいます。

「独立して家を再興するために学を志したことが自立自習の目を開かせ、その費用の捻出旨家の荒地(免税地)を使うことを思いついたことは、独立を望む少年の知恵であった。年貢のかからない方法で、**小を積んで大をなす**、現実的な蓄積の道を金次郎は歩み出した」。

「二宮の本家は寛政九年(1797)絶家となり、また母方の実家も享和二年(1802)祖父太兵衛の死去で衰運に向かい、自家の復興は金次郎の肩にかかっていた。金次郎は、自分の家ばかりではなく、本家も母の実家も、同じように衰運に見舞われた実情をつぶさに体験した。金次郎が困窮のなかにつけて身につけたものは、どんな事業にも元手がいるという

ことであり、その元手を得るには一攫千金的なことでは駄目で、少しずつ積んでいくという道であった。『**績小為大**』ということがかれの終世の人生観となった」。

「文化元年（1,804）万兵衛宅を出て村内の名主岡部家に奉公し、やがて文化三年三月には生家に帰り、亡父利右衛門が質に入れた下品九畝十歩を三両で受け出している。この年から金銭出納帳をつけ始めたが、翌文化四年には、作徳米十三俵・貸付米七俵・賃金三分とあり、五年には貸付の米金がふえ、賃金も三両二分二百文とふえている。米金を貸し付けて利息を得ることは二宮の重要な理財法であった。これ以後、余裕があれば田畑を買い入れ、文化七年からは、田畑の大部分を小作に出し、手もとにはわずかの自作地を残すだけとなった。すでに一人前の農民に成長していたのだ」。

薪を背負いながら、歩きながら、本を読めば良いのです。それで、この **労働時間の二律背反を解決する「負薪読書」**（ふしんどくしょ：薪を負って書を読む）の金次郎スタイルが世界で初めて生まれたのです。

それで、先生が歩きながら読んだ中国の古典が、生涯、役に立ちました。中国の儒教の本に書かれていたことが「報徳仕法」に示唆を与えてくれました。でも、そこで解かれているのは、例えば、「仁」です。本には、「答は『仁』に従えだ」となっています。でも、現実問題では、「仁」はどこにあるかが問題です。

## 農民を苦しめる二つの敵：自然災害と支配者たちによる悪政

あるとき、領主さまから、お役人の一人に取り立てられて、貧困村の再建を依頼された尊徳先生は、「まず、守るべきものは領内の農民たちの命と生活だ」と覚悟します。農民には、自分たちを苦しめる敵が二つあります — 「**自然に依る災害**」と「**支配者たちによる悪政**」です。この二つが、農民たちを苦しめています。まず、報徳先生は、この二つの敵から農民たちを守り、救ってやらなければなりません

### 「天道」としての自然

まず、自然です。自然は、人間にとって脅威であり敵です。農民たちは、ルソーのいう「自然に帰れ」とは全く逆の立場にいます。人間である農民の勤めは、まず、農作業に勤しむことです。もし、この人間の勤めを怠れば、自然は自然で、己の務めに励み、雑草を生やし、堤を崩し、掘りを土砂で埋め、橋を壊します。このように、自然の働きに対して、日々、尽力を尽くしてその働きを抑えなければ人は生きていけません。でも、その一方で、稲を実らせ、野菜を育て、水を施し、木々を実らせるのも「自然」です。さあ、困りました。これこそ、「二律背反」です。

また先生は、ほかの箇所でも次のようにいいます —

「夫れ、萬物、自然の時あり。其の時にあらざれば其の事を為すあたわず。百穀の生々を欲すといへども春陽至らざれば蒔くことあたはず。若し、寒中之を蒔く時は労して益なし。豈（あに：どうして）、益無きのみならん。却ってその種をうしなへり」。（『報徳記』84頁）

農民が先ず従うのは、季節の働きです。春に苗を植え、タネを蒔きます。あとは「自然」が勝手に苗をコメに、種を野菜にしてくれます。自然は人間にとって、最も頼りになる存在です。自然あっての農民です。でも、尊徳先生は、この自然と人間との関係について独特の考えをもっていました。自然は常に「善なるもの」ではありません。時には、「悪」にも変わります。それで先生は、「自然の働き」と「人間の働き」を、それぞれ「天道」

と「人道」とに分けます。

この「天道」と「人道」との関係は複雑で、「天道」は「人道」にとって良いことばかりではありません。自然は、時には、農民の働きの邪魔ばかりします。日々、暑かったり寒かったり、雨が多かったり日照りがつづいたり、水が涸れたり川が氾濫したり、稲が枯れたり雑草が広がったりで、その間、農民は、水路を引いて水を田に流したり、雑草を刈ったり、肥料を撒いたりしなければなりません。とはいえ、人間は自然の恩寵によって生きています。春に苗を植えれば、秋にはコメができます。山からの水は田の苗を育ててくれます。また、柿の木や蜜柑の木に勝手に果実を実(みの)らせてくれます。

こう見てくると、農民にとって、「仁」は常に「天にあるのです。むろん儒教では、「聖賢の道は天の道」であり、決して揺るがすことはできません。でも、先生は違います。「天理は永遠に変化はないが、人道は一日怠ればたちまち廢(はい:すたれる)する」というのです。天理を厳格に守れば、人道は廢ります。人間は、常に自然に対して挑戦をつづけなければ作物は獲れません。さて、この「天道と人道」の二つの原理の両立は可能なのでしょうか？ 報徳先生は、次のようにいいます。

**人道と天道との別** 「天理と人道との差別をよく区別できる人は少ない。人身があれば、[その一方で、自然が自らの働きで世界を支配しようとする] 欲があるのは天理である。田畑へ草の生ずるのと同じである。堤は崩れ、堀は埋まり、橋は朽ちる。これが天理である。ところが、人道は、私欲を制するのを道とし、田畑の草を取るのを道とし、堤は築き、堀はさらい、橋はかけ替えるのを道とする」。【『二宮翁夜話』6頁】

「[天理が支配する]世界は巡りめぐって止むことがない。寒さが去れば暑さが来る。夜が明ければ昼となり、昼になればまた夜となり、また万物生ずれば滅び、滅びればまた生ずる。たとえば銭をやれば品物が来、品物をやれば銭が来るのと同じである。寝ても醒めても、居ても歩いて、昨日は今日になり、今日は明日となる。田畑も海山もみなそのとおり、ここで薪をたき減らす分は山林で生木し、ここで食い減らすだけの穀物は田畑で生育する。野菜でも魚類でも、世の中で減るだけは田畑・河海・山林で生育し、生まれた子は時々刻々に年をとり、築いた堤は時々刻々に崩れ、掘った堀は日々夜々に埋まり、葺いた屋根は日々夜々に腐る。これが天理の常である」。【『二宮翁夜話』3頁】

「しかし、人道はこれとは異なる。なぜならば、風雨に定めがなく寒暑が往来するこの世界に、羽毛もなく、鱗(うろこ)や殻(から)もなく、はだかで生まれてきた人間は、家がなければ雨露をしのぐことができず、衣服がなければ寒暑をしのげない。そこで、人道というものを立てて、米を善とし莠(はくさ:水田に生える雑草)を悪とし、家を造るのを善とし、こわすのを悪とする。これはみな人のために立てた道である。それゆえ人道というのである。**天理からみれば、これらにも善悪はない。**その証拠には、天理に任せておけばみな荒地になって、開園の昔に帰る。なぜなら、それが天理・自然の道だからである。天には善悪はないから、稲と莠の区別をしない。種のあるものはみな生育させ、生氣のあるものはみな発生させる。人道はその天理に従うけれども、そのうちにそれぞれ区別をし、稗(ひえ)や莠は悪とし米や麦は善とするように、**みな人身に便利なものを善とし不便利なものを悪とする。**そこに天理と異なるところがある。なぜならば、人道は人が立てたものだからである」。【同】

「このように、天理と人道とはまったく別のものだから、天理は永遠に変化なく、[しかし]人道は一日怠ればたちまち廢れる。だから、**人道は勤(つと)めるのを尊しとし、自然に任せ**るのを尊ばない。人道の勤めるべきは、己に克(か)つという教えである。己というのは私欲である。私欲は田畑にたとえれば草である。克つというのは、この田畑に生ずる草を取り捨てることだ。己に克つというのは、わが心の田畑に生ずる草をけずり取り、取り捨て

て、[人道とは]わが心の米麦を繁茂させる勤めのことだ。これを人道という。『論語』（顔淵篇）に、『己に克(か)って礼に復(もと)る』（勤め働くことで自分の環境にうちかかって礼の規則にたち帰る）とあるのは、この勤めのことだ。【『二宮翁夜話』6頁】

**人道的に勤める** なんだから、よく分かりません。「人道は、すべてを自然に任せるのではなく、自分の心に従って、自然が育てる『草』ではなく、人間の役に立つ『米麦』を繁茂させるのが人間の勤めの本位だ」というのです。大胆に天理の働きに逆らい、人道によって、人道の為に、天道である「自然」を変えてもいいのです。でもそれは、天道を絶対とする儒教の精神に反します。しかし、『論語』でも、「己に克って礼に復る」（人道に勝って天道にかえる）と言っているのです。「これが儒教の本意である」と先生は解釈するのです。なるほど。先生は、「論語読みの論語知らず」ではありません。こうして先生は、人道を優先して、「天道か、人道か」の二律背反を克服したのです。「歩きながら本を読め」の精神と同じです。

## 天道×人道 と 仁×智

また、先生は、「天道と人道の二律背反」について、別のところで次のように言っています。

翁はこう言われた — 「天道は自然である。人道は天道に従うけれども、また人為である。人道を尽して天道に任(まか)すべきである。人為をゆるがせにして天道を恨んではならない。庭前の落葉は天道である。無心に日夜積もる。これを払わないのは人道ではない」。【『二宮翁夜話』167頁】

**落ち葉は天道** 「人間は自然に従え」という。この大きな自然には到底小さな人間は逆らえない。人道を尽して天道に任すべきで、「だから、木が落ち葉を散らしたらそれを掃きなさい」という。これが人間の務めだという。だが、先生はこれで終わりません。そのあとがまた凄い。

落ち葉は、払えばまた落ちる。それに心を煩わし心を労し、一葉が落ちれば、箒(ほうき)を取って立つなどは、塵芥(ちりあかた)のために使い立てられるというもので、愚かなことだ。木の葉の落ちるのは天道である。人道をもって毎朝一度は払うがよい。しかしまた落ちても捨て置いて、**無心の落葉に使い立てられてはいけぬ**。また人道をゆるがせにして、積もり放題にしてはならない。これが人道である。

天が落とす落ち葉は掃かなければならないが、だからといって、「しょっちゅう、箒をもって掃除ばかりしてはいけぬ」と先生はいうのです。ここからが、『四書五経』には書いてないことです。「木の葉が落ちるのは天道であるが、一度は払ってもいいが、時には捨ておきなさい」と人道に助言します。さらに、「落ち葉に使い立てられてはいけぬが、積もり放題にしてもいい」ともいいます。さあ、どうすればいいのでしょうか。ここからが、報徳先生の出番であります。

**何度でも教える** ここで、落ち葉から人間の話になります。ここがまた、凄い。

愚人であろうと、悪人であろうと、**よく教えるがよい**。教えて聞かなくても、それに心を労してはならない。聞かないからといって捨てることなく、**何度でも教えるがよい**。

落ち葉のような人間もいます。何度、掃いてもまた落ちてくるのです。「相手が間違っていたらあまり気にせず、一度はあきらめて、何度でも教えろ」という。ここが、「絶対善」を説く『四書五経』にはないところです。誠の「仁の心」に長(た)けた報徳先生、独自の

解釈です。凄いです。まだ、先生のご温情はつづきます。

教えてもそのとおりにしないからといって憤慨してはいけない。聞かないからといって捨ててしまうのは「不仁」である。教えてもそのとおりにしないからといって憤慨するのは「不智」である。不仁と不智とは徳者の恐れるところである。仁・智二つを心がけて、自分の徳を全うすべきだ。【『二宮翁夜話』167頁】

「庭の落ち葉を掃きなさい。ただ、いつまでの掃いてばかりいてはいけません。いつかは、天も落ち葉も冬になって落ちきれば、もう落とさなくなります。それまで待ちなさい」というのです。なるほど。これが、人道の「智恵」というものです。愚人や悪人相手にして、待てないのは智恵がないからだ。これを、「不智」と言う。

**不仁 と 不智 とは徳者の恐れるところ** である。仁・智二つを心がけて、自分の徳を全うすべきだ。

「世の中、『仁の心』だけではいけません。『智恵』も働かせて相手にあたりなさい。諦めてはいけません」というのが「報徳仕法」です。なるほど、納得。実践的です。

でも、この一時的な放置はときどき、誤解をまねきます。落ち葉を掃かずにいると、「庭が汚いではないか」「なんて無精なのだ」「自分の役目を果たしなさい」などと言われます。なんとも「縁なき衆生は度し難し」（えんなきしゅじょうはどしがたし：人の忠告を聞こうともしない者は救いようがない）です。そんなとき、無理解な相手を前に、じっと我慢です。先生は、いつも我慢しました。ここでの「縁なき衆生」とは怨望の持ち主たちのことです。結局は、その人たちも先生が説得して言うことをきくようになりました。先生の論法はいつも、「足して二で割る」のではなく「足して三にする」ものです。困っている人や悪に流れている人も、決して見捨てたりしません。

そんな報徳先生のお話はまだつづきます —

## 風紀改良方政事の本意

翁はこう言われた — 「遊惰の風が深く染みこんだ村里を新しくするのは、まことにむづかしいものだ。なぜなら、①法で戒めることもできず、②命じても行なわれず、③教えも施（ほどこ）しようがない。これに、①精励を行なわせ、②義に向かわせるということは、まことに困難だ」。【『二宮翁夜話』128頁】

「私が昔、桜町の陣屋に行ったとき、配下の村々は、極度の悪習・弊風に染まって、どうすることもできなかった。そこで私は、深夜あるいは未明に、①村里を巡行した。②怠けているのを戒めるでもなく、③朝寝を叱るでもない。④善い悪いも問わず、⑤勤惰も言わず、ただ自分の勤めとして、⑥寒暑・風雨といっても怠らなかつた。二、三カ月すると、初めて足音を聞いて驚く者もあり、また足跡を見て怪しむ者もあり、また現に出会う者もあった。それから次第に、①戒心を生じ、②畏心をいだき、数カ月すると、③夜遊び・④博突・⑤鬭争はもちろん、夫婦の間や奴僕の間にも、⑥叱ったり、⑦罵ったりする声を聞かなくなった」。

「諺に、『権平が種を蒔けば烏（からす）が掘る。三度に一度は追わずばなるまい』という。これは田舎のたわむれ言であるが、役職についている人も知らなくてはならない。烏が田圃を荒らすのは烏の罪ではない。田圃を守る者が追わない過ちだ。政道を犯す者があるのも、官がこれを追わない過ちだ。これを追う道も、権平が追うのを勤めとして、捕えるのを

**目的としない** ようにありたいものだ。このたわむれ言は、政事の本意にかなっている。田舎の言葉とはいいながら、心得なくてはならない」。

これも良いお話です。ここで先生は、村を巡行するという「智」を使ったのです。でも、この「智」には、「仁の心」もありました。口で叱ったり、捕らえたり、罰したりはしないのです。**ただ黙って村内を歩くだけ** です。それだけで、村人たちは自ら改心したのです。これが「仁の心」です。こちらは、「お前のことを見捨てていないぞ」という信号を絶えず送りつづけているのですから。

【2025/03/23 都築正道】